WEP

VOL. 132
ウエップ
俳句通信

俳句通信

特別作品20句　森田純一郎「去年今年」

特集Ⅰ〈2022年のわが結社の佳句・5句〉

青草　河　磯石　杉　銀瑠璃　南風　街　蘭
梓　銀漢　白鳴鐘　青海波　多磨　鳴の子　松の花　ランブル
泉　草の花　秀　梅檀　玉梓　野火　汀　陸
いにしへ　雲の峰　秋麗　草樹　玉藻　初蝶　麦　燎
伊吹嶺　耕・Kô　朱夏　空　鶴　パピルス　紫　巡路
雨月　鴻　樹氷（北見弟花）　対岸　絹　ひいらぎ　森の座　若竹
円座　小熊座　樹氷（白濱一羊）　鷹　天為　雛　門　清
海原　笹　春耕　たかんな　天頂　氷室　雪解　やぶれ傘
火星　山茶花　春燈　滝　都市　諷詠　予感
郭公　栞　春嶺　苔　夏潮　風土　羅
かつらぎ　嶋　末黒野　橘　波　舞　薬園

特集Ⅱ〈1カ月で詠んだ句の一切合切〉

星野高士「正月一切　寒一切」
坊城俊樹「近詠・年末年始2023」
柳生正名「兀兀と」

●作品●高橋さえ子・白岩敏秀・笠鼓七波・
依田善朗・小林貴子・小川軽舟・岡山祐子・
鈴木正子・すずき巴里・飯野きよ子・河瀬俊彦・
森野　稔・澤　好摩・黒田咲子・楠田哲朗・
羽村美和子・福神規子　ほか

旅を来てお弓の国のおぼろ月

富安風生

おぼろ月

野のヘラブナ釣りは二月末から三月初めに春の釣りが始まる。とは言っても釣れる確率はまだ低く、安定して釣れるのは三月中旬を過ぎてからで、雨上がりが良い。

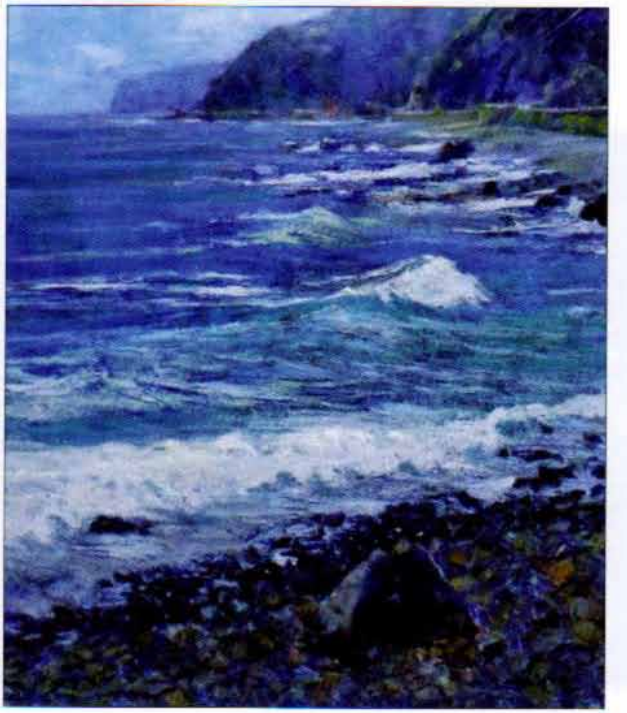
岡山県の児島湾の一部を干拓した時に出来た七区調整池はこの時期に大型のヘラブナが釣れ、毎年出掛けた。

この日も雨上がりで期待十分。しかし、朝から湖面は静かで一向に釣れる気配はなく、土手で昼寝などして春の気分を満喫して過ごした。夕まずめ、水際が急に活気付き、へらぶなが入れ食いになった。浮子が見難くなると急に冷え込んで来て、急いで釣り具を片付けて薄闇の中を枯れた雑草が残る土手をよじ登った。

ほっとして東を見ると、手前の菜花畑から向かいの山に夕霧が棚引き、おぼろ月が上がっている。山裾の家々の灯りが微かに見え、息を整える間、暫くぼんやり眺めていたがブルっと身震いをして急いで車に乗り込んだ。

ヘッドライトを点けて帰路に付きながら久々に良い釣りをしたと思った。

絵・文　杉原武弘



春の浜大いなる輪が描いてある　高浜虚子

早春の岬

♪八坂八浜の難所でさえも親の後生ならいとやせぬ

野口雨情作詞「牟岐小唄」の一節です。

四国の東南、国鉄牟岐線で南へ、終点牟岐駅で阿佐東線に乗りかえ、高知県東洋町へ、途中八坂八浜と呼ばれる起伏に富んだ海岸線が延々と続く。

「海部郡史」には、「八坂八浜は旧国道土佐街道筋で険阻なる細道で、海辺の途では磯伝いで全く道路なき部分もあった。

土佐街道中地は悉く車道が通じているのに独り八坂八浜のみ難工事を理由に見捨てられ、交通の大障害をなして居った。（略）大正三年より八個年継続して施行するに決定した。」とあり、当時の総工費は十三万九千三百六十七円、大正三年に実測、大正四年に着手し大正十一年三月に完成をみた。

画布を構えた場所は、小さな岬をいくつか回り、室戸岬を日の当たりにした磯浜で、この日、風が強く、画架に石のおもりを吊り下げ難渋しながら描いた。

画面に遠く青く顔を出している岬が土佐湾を中にして室戸岬と対峙する行当岬です。

絵・文　枡田　務

特別作品 20句

去年今年

森田純一郎

十字墓広々として青畝の忌

青畝忌や峠現れさう満池谷

甲山真正面や青畝の忌

ペン画なす枯木の囲む青畝墓

聖夜星ガラシャ右近に降りにけり

特集Ⅰ

〈2022年のわが結社の佳句・5句〉

2022年にはどんな俳句が詠まれたのか。
結社誌に発表された句の中から主宰・副主宰・代表によって佳句5句（1人1句として）を送っていただきました。
ここから最近の〝俳句の風景〟が見えてくるはずです。

「青草」　草深昌子 選

ふくふくと芋虫壁を伝ひけり　奥山きよ子
山小屋の一夜を共にはたた神　佐藤昌緒
雉鳴くやげんげ田に首浮かしつつ　二村結季
紫陽花の一束といふ一抱へ　松井あき子
建国日ゴミ収集車来たりけり　山森小径

「梓」　上野一孝 選

ドアの鍵閉めて入道雲に乗る　菅　美緒
八月や骨になるまで反抗期　知念哲庵
笑はせて法話終りぬ植田風　出口紀子
術痕も親しくなりぬ冬至風呂　水野晶子
白南風や句点のやうに七つ島　山本　新

「泉」　藤本美和子 選

草刈機止みたる草の匂ひけり　星井千恵子
鳥飛ぶや芒種の節を水平に　取違憲明
青葉木菟火の気の少し欲しき夜　三上かね子
黒牛の二百十日の咀嚼音　木本隆行
柚子坊の器量ととのふ葉陰かな　松山暁美

「いには」　村上嘉代子 選

父として話聞く夜やぬくめ酒　辻　忠樹
月おぼろ角を曲がれば戦場へ　坂本茉莉
夫と子の通訳をして秋灯　橘内訓子
ひとり来し人がいつぱい落葉道　ひめみや多美
スケートの女が靴にひざまづく　堀合優子

特集Ⅱ
〈1カ月で詠んだ句の一切合切〉

俳人は普段、どんな句をどのくらい詠んでいるのか。
2022年12月からこの1月初旬にかけて詠んだ句の
一切合切を3人の俳人に出していただきました。

星野高士

坊城俊樹

柳生正名

正月一切　寒一切　星野高士

雪吊に雲一筋のかかりをり

雪吊の根元を走る地底かな

雪吊に本当の雪降つてをり

雪吊に人影過る昼下り

雪吊に迷ひ鴉の来ては去る

本山の裏庭にして池普請

池普請音なく昏るる一と日かな

女より男の覗く池普請

狐火や仙台坂に灯点るも

狐火や源氏の裔か平家かも

狐火の中に魂見えざりし

遠火事に人の賑ふ裏銀座

半焼の夜空は焦がしきらざりし

火の番の煙草くゆらす時もあり

蕪村忌の島原に人まだ居りぬ

人まばらなる花街の春星忌

毛筆の墨を散らかし春星忌

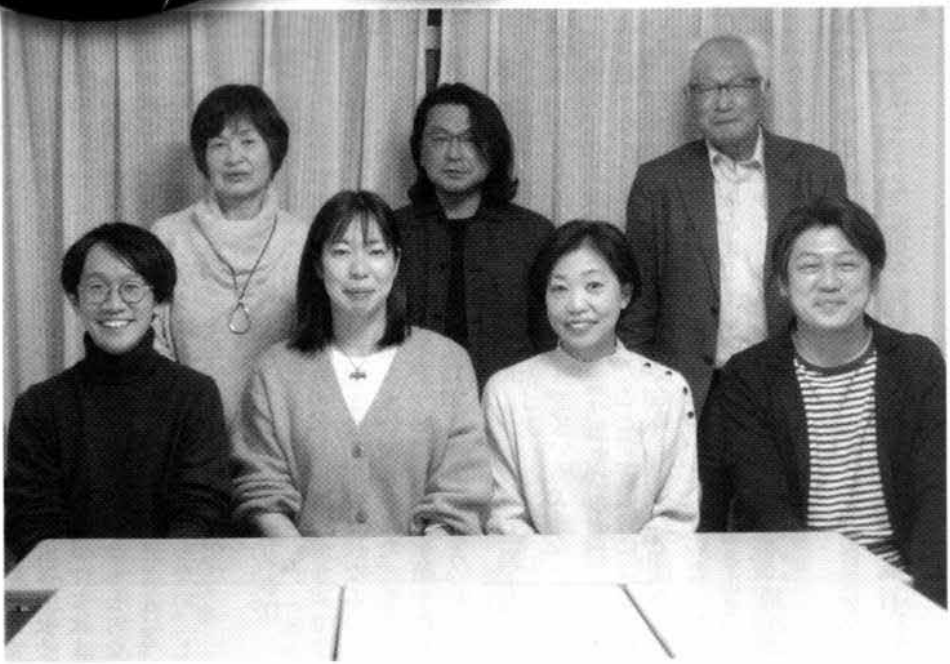
誰も近寄らぬ川岸の社会鍋

ポケットに投銭入れて社会鍋

社会鍋世間話も一通り

ほしの・たかし
昭和27年（1952）8月17日・神奈川県生まれ　「玉藻」主宰

超結社句会／新12番勝負



前列右から吉田氏、黒澤氏、西山氏、中西氏
後列右から星野氏、鴇田氏、藤本氏

ゲスト　黒澤麻生子・鴇田智哉
中西亮太・西山ゆりこ
吉田哲二

ホスト　星野高士・藤本美和子

編集部　本日の参加者は「磁石」「秋麗」同人の黒澤麻生子さん、「オルガン」同人の鴇田智哉さん、「駒草」同人の西山ゆりこさん、「阿吽」同人の吉田哲二さん、「円座」「秋草」同人の中西亮太さん。5句投句、7句選です。忌憚のない意見交換をお願いいたします。

高士　では、始めます。今日は点が割れましたね。3点句が7つあります。

成人の日の牛めしの隙に箸　麻智亮

麻生子　今日は「成人の日」で、晴れやかなところではなく、庶民的なところを詠んだのがいいなと思います。ささやかな中の晴れやかな感じが出ていると思いました。

亮太　「牛めし」はちょっといいお弁当なんだけど、俗っぽさがある。「成人の日」と結び付けることで、めでたい感じが「牛めし」にも出てくるなと。箸が隙間にすっと入っているという発見もある句だと思いました。

智哉　「成人の日」という大きなところから入っていって、「牛めし」があって、最後は「箸」にいくのが、視覚的にも上手に出来ている。食べている途中なのではないかと思っ